

## II. 取組の実績と成果

### 1. 地域住民による教育ボランティアを導入したカリキュラム

本学の現代 GP の取り組みの根幹であり、最も特徴的なことは、大学と地域が協働して教育ボランティアを導入したカリキュラムを構築してきたことである。地域住民の健康生活を支援する実践能力の育成を図る目的で、平成 18～20 年度の 3 年間にわたり、地域住民による教育ボランティアを導入した授業を展開した。

教育ボランティアを導入した授業は、平成 18 年度においては「看護技術演習Ⅰ」「老年健康生活支援論」「小児健康生活支援論Ⅰ」「コミュニティヘルスケア」の 4 科目、平成 19 年度においては「看護技術演習Ⅰ」「看護技術演習Ⅱ」「看護技術演習Ⅲ」「老年健康生活支援論」「小児健康生活支援論Ⅰ」「コミュニティヘルスケア」「健康生活支援学概論」「情報コミュニケーション演習」「健康生活支援学実習Ⅰ」の 9 科目、平成 20 年度においては「看護技術演習Ⅰ」「看護技術演習Ⅲ」「老年健康生活支援論」「小児健康生活支援論Ⅰ」「健康生活支援学概論」「災害看護システム論」「健康生活支援技術演習」「健康生活支援学実習Ⅰ」「助産診断技術学」の 9 科目であった。

地域住民が教育ボランティアとして授業に参加することによって、教育方法の工夫が促され、多様で、より実践的な学習が可能になった。さらに、それらの積み重ねにより、本学の教育活動全体が活性化されるなどの成果が得られた。また、今回の成果をとおして、地域住民と共に創っていく新たな看護教育モデルを提案することができた。

以下、教育ボランティアを導入した授業の実績と成果について、科目ごとに具体的に報告する。

#### 1) 「看護技術演習Ⅰ」および「看護技術演習Ⅱ」

(1) 教育ボランティアを導入した授業の実績（「看護技術演習ⅠおよびⅡ」）

「看護技術演習Ⅰ」および「看護技術演習Ⅱ」の授業では、約 80 名の学生を半数（約 40 名）のクラス（クラス①、クラス②）に分け、同一の演習内容を開講している。各クラスともに演習時間は 180 分で、演習時間の最後には約 30～40 分間の「学生デモンストレーション(学生デモ)」を設定している。この「学生デモ」は、各単元で学習した技術を演習の成果として、代表の学生が披露するものであり、一部の単元の「学生デモ」における模擬患者の役割を、教育ボランティアとして地域住民が務めた。教育ボランティアが模擬患者を務めた単元は、日常生活の援助技術（更衣、体位変換、食事介助、床上排泄、排便への援助）の単元と、患者観察の基本となるバイタルサインズ（血圧・体温・脈拍・呼吸）の測定技術の単元であり、平成 18～20 年度で通算 19 単元であった。また、教育ボランティアの数は延べ 105 名にのぼった。

地域住民による教育ボランティアが模擬患者を務めた「看護技術演習Ⅰ」および「看護技術演習Ⅱ」の授業内容を表Ⅱ-1-1 に示した。

表Ⅱ-1-1 教育ボランティアが模擬患者を務めた「看護技術演習ⅠおよびⅡ」の内容

実施日	実施場所	参加者		模擬患者の場面設定と役割
		ボランティア	対象学生	
平成18年 12月13日(水)	神戸市看護大学 北館実習室Ⅲ	4人	1年 80人	入院直後の患者が脈拍、体温の測定を受け、氷枕を使用する場面設定、学生の援助に対する評価や意見交換
平成18年 12月20日(水)	神戸市看護大学 北館実習室Ⅲ	4人	1年 80人	入院直後の患者が血圧・脈拍・体温・呼吸の測定を受ける場面設定、学生の援助に対する評価や意見交換
平成19年 1月10日(水)	神戸市看護大学 北館実習室Ⅲ	4人	1年 80人	左半身麻痺の患者が寝衣交換の援助を受ける場面設定、学生の援助に対する評価や意見交換
平成19年 4月18日(水)	神戸市看護大学 北館実習室Ⅲ	3人	2年 81人	骨折のため右上肢・右下肢を動かさない患者が食事の援助を受ける場面設定、学生の援助に対する評価や意見交換
平成19年 5月30日(水)	神戸市看護大学 北館実習室Ⅲ	7人	2年 81人	ベッド上安静患者が床上排泄の援助を受ける場面設定、学生の援助に対する評価や意見交換
平成19年 6月6日(水)	神戸市看護大学 北館実習室Ⅲ	8人	2年 81人	ベッド上安静患者が浣腸・座薬挿入などの排便の援助を受ける場面設定、学生の援助に対する評価や意見交換
平成19年 10月17日(水)	神戸市看護大学 北館実習室Ⅲ	6人	1年 82人	入院直後の患者が血圧・脈拍・体温・呼吸の測定を受ける場面設定、学生の援助に対する評価や意見交換
平成19年 10月31日(水)	神戸市看護大学 北館実習室Ⅲ	6人	1年 82人	右半身麻痺の患者が寝衣交換の援助を受ける場面設定、学生の援助に対する評価や意見交換
平成19年 11月7日(水)	神戸市看護大学 北館実習室Ⅲ	6人	1年 82人	肺炎患者が足浴の援助を受ける場面設定、学生の援助に対する評価や意見交換
平成19年 11月21日(水)	神戸市看護大学 北館実習室Ⅲ	6人	1年 82人	熱傷のため両手が使えない患者が食事の援助を受ける場面設定、学生の援助に対する評価や意見交換
平成19年 1月28日(水)	神戸市看護大学 北館実習室Ⅲ	6人	1年 82人	床上排泄の援助を受ける場面設定、学生の援助に対する評価や意見交換
平成19年 12月5日(水)	神戸市看護大学 北館実習室Ⅲ	6人	1年 82人	ベッド上安静患者が温罨法・浣腸・座薬挿入などの排便の援助を受ける場面設定、学生の援助に対する評価や意見交換
平成20年 10月15日(水)	神戸市看護大学 北館実習室Ⅲ	6人	1年 83人	ベッドから動けない患者に対して安全・安楽に姿勢を変える援助を受ける場面設定、学生の援助に対する評価や意見交換
平成20年 10月22日(水)	神戸市看護大学 北館実習室Ⅲ	5人	1年 83人	入院直後の患者が血圧・脈拍・体温・呼吸の測定を受ける場面設定、学生の援助に対する評価や意見交換
平成20年 10月29日(水)	神戸市看護大学 北館実習室Ⅲ	6人	1年 83人	肺炎患者が足浴の援助を受ける場面設定、学生の援助に対する評価や意見交換
平成20年 11月5日(水)	神戸市看護大学 北館実習室Ⅲ	6人	1年 83人	骨折のため、右上下肢が使えない患者が食事の援助を受ける場面設定、学生の援助に対する評価や意見交換
平成20年 11月12日(水)	神戸市看護大学 北館実習室Ⅲ	6人	1年 83人	身体を動かさない患者が寝衣交換の援助を受ける場面設定、学生の援助に対する評価や意見交換
平成20年 12月10日(水)	神戸市看護大学 北館実習室Ⅲ	6人	1年 83人	ベッド上安静患者が床上排泄の援助を受ける場面設定、学生の援助に対する評価や意見交換
平成20年 12月17日(水)	神戸市看護大学 北館実習室Ⅲ	6人	1年 83人	ベッド上安静患者が温罨法・浣腸・座薬挿入などの排便の援助を受ける場面設定、学生の援助に対する評価や意見交換

(2) 教育ボランティアを導入した授業における感想・意見（「看護技術演習ⅠおよびⅡ」）

教育ボランティアが模擬患者を務めた「看護技術演習Ⅰ」および「看護技術演習Ⅱ」の授業における、教育ボランティア（地域住民）、学生および教員の主な感想・意見を、以下の表Ⅱ-1-2、表Ⅱ-1-3、表Ⅱ-1-4にそれぞれ示した。

表Ⅱ-1-2 教育ボランティアの主な感想・意見「看護技術演習ⅠおよびⅡ」

- ◆言葉使いをもう少し丁寧にしてほしい。
- ◆右半身麻痺の患者なのに、学生はそのことを忘れていたようだった。
- ◆支えられている学生の腕が頼りなかった。
- ◆安楽というものは人によって違う。個々が感じる安楽がどういうものか、一人ひとりのことを考えてほしい。
- ◆援助が終わった後で和式寝衣を整える際に、しっかりと背中やしわを伸ばしてもらいたい。
- ◆女性の陰部清拭の際、上下にゴシゴシ拭かれると感染しないかと心配だった。
- ◆高齢者というものは、足を曲げられただけでも関節が痛むことがあることをわかってほしい。
- ◆食事について丁寧に聞いてくれて嬉しかった反面、あまりしつこく聞かれすぎると、うるさく感じた。
- ◆高齢者は若者と違って、動作に時間がかかったり、動作が困難だったりする。相手の年齢や老化の状況を考えて援助をしてほしい。
- ◆患者が尿意を我慢している状況では、速やかに援助してもらいたい。
- ◆寝ている患者の足元で何かをされると見えないので不安だった。状況を話しながらしてくれるともっと良かった。
- ◆「寝衣」や「洋式便器」といった専門用語を使われても、素人にはわからないことを認識してもらいたい。
- ◆声のトーンや話し方にも気を配れると、もっと患者に喜んでもらえる看護師になれるのではないかと思った。
- ◆回を重ねるごとに学生が成長しているのがわかった。今後が楽しみだ。
- ◆大学内に入ることができて嬉しかった。今後も学生教育の力になりたい。
- ◆看護師になるということは大変なことだと思った。頑張るって欲しい。
- ◆患者の気兼ね・負担感が軽くなるようなコミュニケーション、それも技のうちであることを理解してほしい。
- ◆実際に、入院時にベッド上で排泄しようとしてもなかなか出ずに困った経験がある。学生たちに、その時の、排泄を促す効果的なナースの援助について、伝えることができてよかった。
- ◆とてもソフトな雰囲気に関わってくれたので安心できた。
- ◆学生の対応に癒されて、本当に病気が治って退院するような感覚になった。
- ◆援助を受ける際に、どんな手順で何をするのか、行為の流れの中で、順を追って説明しながら実施してもらおうと、受け入れやすいと思った。
- ◆いつか自分が入院した時には、新人看護師に温かく接してあげたいと思った。

表Ⅱ-1-3 学生の主な感想・意見「看護技術演習ⅠおよびⅡ」

- ◆看護場面をイメージすることができた。リアリティがあつて実感がわいた。緊張したがよい経験になった。
- ◆技術ばかりに気をとられずに、患者との会話から全身状態を観察する必要性があることがわかった。
- ◆手順をわかりやすく説明しながら実施する必要性がわかった。
- ◆体位変換の後、教育ボランティアから「怖かった」と言われ、患者が安心できる援助を行う大切さがわかった。
- ◆看護者としての視点ばかりではなく、患者の視点に立つことの大切さを学べた。
- ◆クラスメイトが教育ボランティアにケアをしているのを見て、自分もやらせてもらいたいと思った。
- ◆とても緊張したが、自分のできていない所などの意見を頂き、よい学びになった。
- ◆手順をしっかり把握してなかったため、教育ボランティアに迷惑をかけてしまった。練習を積まなければならないと思った。
- ◆相手に不快感や遠慮、気遣いをさせないようにするにはどうしたらよいのかを考える機会になった。
- ◆食事介助では患者のスピード、好みに合わせた援助を行うことが大事であることがわかった。
- ◆人の手を借りなければ排泄できない患者の気持ちを、もっと理解できるようになりたいと思った。
- ◆排泄の援助は、自分が考える以上に、丁寧にやさしく行わなければならないことがわかった。
- ◆優しい声かけが患者の心理的負担を楽にさせることもあると学んだ。
- ◆自分が気にならないことでも、患者には気になることもあると気づかされた。
- ◆常に患者の立場に立って考えられるようにしたいと思った。

表Ⅱ-1-4 教員の主な感想・意見「看護技術演習ⅠおよびⅡ」

- ◆学生の集中力・適度の緊張感を維持させることができ、大変有効であった。
- ◆臨場感が演出でき、学生の実践訓練の機会になった。
- ◆教育ボランティアに協力いただいた単位では、学生の目が輝いていた。
- ◆「うまくいかなかった」と涙を流す学生もいた。負の感情を引きずらないようにフォローすることも必要だと思った。
- ◆学生の看護技術に対する自信につながったと思う。
- ◆学生は援助に細やかな配慮が必要だということに気づいていた。
- ◆地域住民の「気持ちよかった」という言葉が、患者の喜びとして学生に伝わっていた。
- ◆援助のテクニックだけでなく、援助の意味やコミュニケーションの重要性も学ぶことができていた。
- ◆看護学生として、看護師としての今後をイメージできたように思う。
- ◆回を重ねるごとに教育ボランティアの演技が上手になり、より教育的に関わるようになっていくと感じた。
- ◆社会人として、医療者としてその場に立ち、患者とやりとりする責任を学生が感じることをできた。
- ◆学生の食事の援助により、患者役の教育ボランティアが本気でむせてしまうアクシデントがあり、援助の際に起こりうる危険性として深く印象に残った。
- ◆腹圧をかけやすい排泄の方法、患者・介護者双方が楽な援助方法など、患者役である教育ボランティアに対して知識提供ができていた。

### (3) 教育ボランティアを導入した授業の成果（「看護技術演習ⅠおよびⅡ」）

これまでの「看護技術演習Ⅰ」および「看護技術演習Ⅱ」における「学生デモ」では、教員が模擬患者の役割を担っていた。教員は学生にとっては馴染みのある顔ぶれであり、教育的な側面から考えると、実際の現場や患者像のイメージ化には限界がある。「学生デモ」の模擬患者を、教育ボランティア（地域住民）が務める大きな目的は、学生が、看護援助の基本としての相互性を身につけること、すなわち、想定場面の臨場感、リアリティを向上させることである。初年度（平成18年度）は、「学生デモ」の模擬患者に、教育ボランティアを導入することにより、これらの目的が達成できるのかという検証も同時に行った。

平成18年度において、教育ボランティアが模擬患者を務めた演習は、「体温・脈拍の測定と氷枕使用」「血圧測定」「寝衣の更衣」の3つの単元であり、同一の演習を行う2つのクラスのうち、一方のクラス（クラス①）が対象であった。他方のクラス（クラス②）では、従来どおり教員が模擬患者を務めた。両クラスの学生に対して「学生デモ」についての調査を行い、両クラスの結果を比較した。調査内容は「看護技術への興味」「関心の高まり」「集中度」「困難度」「リアリティ」「実際の場面での役立ち感」「緊張感」「自己の課題の気づき」の8項目とし、評価尺度は「全くそう思わない（1点）」から「非常にそう思う（4点）」の4検法を用いた。これらの調査項目について、教育ボランティアによる模擬患者群（クラス①）と教員による模擬患者群（クラス②）の比較を行った結果、教育ボランティアによる模擬患者群（クラス①）のほうが、「学生デモ」におけるリアリティが高いことが明らかになった。その他の項目については、教員による模擬患者群（クラス②）と遜色がなく（差がなく）、教育効果としては、教育ボランティアによる模擬患者のほうが、リアリティが高い分、有益であるという結果が得られた（この研究成果は、2008年8月に開催された第34回日本看護研究学会学術集会で発表した）。

平成18年度の成果をふまえて、平成19年度以降は、クラス①、クラス②ともに、教育ボランティアに「学生デモ」の模擬患者を依頼した。平成19年度は「食事介助」「床上排泄の援助」「排便への援助」「血圧・体温・脈拍・呼吸の測定」「寝衣の更衣」「足浴」など9つの単元、平成20年度は「床上での体位変換」「食事介助」「床上排泄の援助」「排便への援助」「血圧・体温・脈拍・呼吸の測定」「寝衣の更衣」「足浴」など7つの単元において、教育ボランティアの協力を得ることができた。

それぞれの単元において、教育ボランティア（地域住民）の意見やコメント、学生の反応や感想、教員の感想などを鑑みると、教育ボランティアが模擬患者を務めることにより、学生は、技術を単に手順として学ぶだけではなく、多様な生活背景をもつ個々人に合わせて技術を提供することの重要性を、実践的に獲得できるようになったといえる。また、学生は、技術を提供する際の患者とのコミュニケーションを通して、看護援助における相互性を理解し、自分の思い込みに惑わされずに患者の反応を確かめるといふ、看護の基礎的能力を養うことができるようになった。教育ボランティアとしての地域住民の、厳しい中にも暖かさのこもった様々な指摘は、学生の責任感を培い、真剣に学び、練習を重ねることへの動機づけになったといえる。さらに、教育ボランティアに参加した地域住民からは

「自分たちの勉強になった」「もっと学生の力になりたい」「学生をあたたかく見守る姿勢を学んだ」などの声が聞かれ、当初の目的をはるかに超えた大きな成果が得られた。担当教員にとっても、毎回、授業（演習）の最後に教育ボランティアから率直な意見を伺い、「短時間で手際よく」という効率性を追求しがちになる傾向に気づかされ、演習指導における丁寧さや確実さに重点を置く重要性を改めて認識させられるなど、貴重な機会であった。

今回の、教育ボランティアが模擬患者を務めた「看護技術演習Ⅰ」および「看護技術演習Ⅱ」の授業は、学生や教員が模擬患者を務めていた従来の授業では見受けられなかった学生の気づき、特に、緊張感の中でも確かな技術を提供することの重要性へ気づきを獲得できたといえるだろう。

## 2) 看護技術演習Ⅲ

### (1) 教育ボランティアを導入した授業の実績（「看護技術演習Ⅲ」）

「看護技術演習Ⅲ」の授業で、教育ボランティアが模擬患者を務めた単元は、患者とのコミュニケーションや問診技術の獲得、自己の傾向を知ることをねらいとするものであった。平成18～20年度で、通算3単元、延べ69名の教育ボランティアが模擬患者を務めた。

地域住民による教育ボランティアが模擬患者を務めた「看護技術演習Ⅲ」の授業内容を表Ⅱ-1-5に示した。

表Ⅱ-1-5 教育ボランティアが模擬患者を務めた「看護技術演習Ⅲ」の内容

実施日	実施場所	参加者		模擬患者の場面設定と役割
		ボランティア	対象学生	
平成19年 4月23日(月)	神戸市看護大学 北館実習室Ⅲ	13人	2年 80人	何らかの身体症状があるために受診した患者が問診を受ける場面設定、学生の問診に対する評価や意見・要望のフィードバック
平成19年 7月9日(月)	神戸市看護大学 北館実習室Ⅲ	20人	2年 80人	糖尿病のために入院している患者とのコミュニケーションの場面設定、学生のコミュニケーション技術に対する評価や意見交換
平成20年 6月30日(月)	神戸市看護大学 北館実習室Ⅲ	36人	2年 80人	糖尿病または脳梗塞のために入院している患者とのコミュニケーションの場面設定、学生のコミュニケーション技術に対する評価や意見交換

### (2) 教育ボランティアを導入した授業における感想・意見（「看護技術演習Ⅲ」）

教育ボランティアが模擬患者を務めた「看護技術演習Ⅲ」の授業における、教育ボランティア（地域住民）、学生、教員の主な感想・意見を、以下の表Ⅱ-1-6、表Ⅱ-1-7、表Ⅱ-1-8にそれぞれ示した。

表Ⅱ-1-6 教育ボランティアの主な感想・意見「看護技術演習Ⅲ」

- ◆相手に合わせた声のトーンを考えてほしい。
- ◆言葉がはっきりしなくて、質問の意味がわからないことがあった。
- ◆言葉遣いに気をつけないと、品格が問われると思うので気をつけてほしい。
- ◆一般常識には精通しておいてほしい。
- ◆患者と一緒に考える姿勢を身につけてほしい。
- ◆初心を忘れずに今後も患者に接してほしい。
- ◆学生の一生懸命さ、人の話を一生懸命に聞こうという姿勢が伝わってきた。
- ◆患者体験をもつ身として、学生にもっといろいろなことを話してあげたかった。
- ◆こちらの目をじっと見て真剣に話を聞いてくれる姿が好印象だった。本当の看護師さんに話をしているような錯覚になった。きっとその学生はよい看護師になると思った。
- ◆糖尿病患者の事例だったが、患者役を演じる際には糖尿病の知識が必要で、こちらにとって、少し難易度が高かったが、勉強になった。
- ◆3名の学生に患者役を演じてみてわかったことは、学生によって知識に差があるということだった。学生にそのことを伝えてあげたかった。
- ◆こちらの話を引き出すように聞いてくれたので嬉しかった。
- ◆患者体験のない自分でも、学生の役に立てることが嬉しかった。

表Ⅱ-1-7 学生の主な感想・意見「看護技術演習Ⅲ」

- ◆クラスメイトが教育ボランティアに問診しているのを見て、自分もやらせてもらいたいと思った。
- ◆世代の異なる人との会話の難しさを感じた。
- ◆社会常識が不足していると感じた。
- ◆いろいろなことに興味をもっていないといけなと感じた。
- ◆沈黙に困ることもあったが、教育ボランティアが助けてくれた。
- ◆病院実習のことがイメージできた。
- ◆話が横道にそれてしまうとうまく対応できなかった。
- ◆自分のコミュニケーション力について考えることができた。

表Ⅱ-1-8 教員の主な感想・意見「看護技術演習Ⅲ」

- ◆より臨場感のある面接法（問診）の実践訓練ができたように思う。
- ◆普段は態度面で気になる学生も、教育ボランティアである地域住民を相手に、節度のある立居振る舞いをしていた。
- ◆教育ボランティアが学生の話しに丁寧に対応してくれていた。
- ◆教育ボランティアが患者や家族（介護者）としての思いや体験を基に話をしてくれていたため、学生の学習に役立った。

### (3) 教育ボランティアを導入した授業の成果（「看護技術演習Ⅲ」）

壮年期から老年期の教育ボランティア（地域住民）が演じる模擬患者との会話や問診場面では、初対面での挨拶の仕方から言葉の使い方など、これまでに学んだ知識や一般常識をフルに活用することが必要となる。しかし、日頃、同年代の友人との会話が多い学生にとっては、そのようなことが身につけていないことが多い。演習の後の学生の感想や意見をみると、学生は、教育ボランティアが演じる模擬患者との会話や問診を通して、意味ある問いかけや関心をもって話を聴くことが、患者の療養生活や健康生活を支援していくための基本であることを理解できるようになったようである。これらの単元は、極めて

リアリティのある実践訓練の機会になっていたといえる。

今回、「看護技術演習Ⅲ」の授業では、患者とのコミュニケーション、問診の場面において、教育ボランティアが模擬患者を務めた。今回の授業を通して、学生は、相手の話を真摯に受け止めること、すなわち、自分が話すだけではなく聴くことの重要性や、看護職者としての健康に関する知識がコミュニケーションを深めていく上で必要なことを、身をもって理解することができた。さらに、日頃の学生自身のあり方や態度を振り返る貴重な機会にもなったといえよう。

### 3) 健康生活支援学概論

(1) 教育ボランティアを導入した授業の実績（「健康生活支援学概論」）

「健康生活支援学概論」の授業では、平成 19 年度と平成 20 年度に、それぞれ 1 回（計 2 回）、地域の民生児童委員を教育ボランティア（ゲストスピーカー）として招いて授業を行った。その詳細は以下の①、②のとおりである。

① 平成 19 年 5 月 2 日（水）2 限目「健康生活支援学概論」（対象：1 年生 77 人）

学園都市地区の民生児童委員を長年、経験されてきた 60 代の男女 1 名ずつを、教育ボランティア（ゲストスピーカー）として招き、普段の生活や健康に気をつけていること、生きがいなどについて、担当教員がインタビューをする形で、話を聞いた。また、民生児童委員の役割や大学周辺の地域住民の助け合いなどについても話を聞くことができた。

今回の授業に際し、あらかじめ学生から教育ボランティアへの質問を募集し、教育ボランティアには、それらの質問を事前に提示しておいた。学生から教育ボランティアへの主な質問は表Ⅱ-1-9 に示した。

教育ボランティアとして招いた 2 人の民生児童委員のうち、男性は「野菜作り」、女性は「踊り」がそれぞれ自身の健康の秘訣であると話されていた。さらに、民生児童委員の活動が生きがいとなっていること、毎日、忙しい日々を過ごしていることなどを、学生の質問に答えるかたちで話を聞くことができた。授業の最後の 10 分間には、女性の教育ボランティアが、音楽に合わせて「生きがいである日本舞踊」を披露した。学生も教員も、あまりの美しさに、ただただ見とれていた。



日本舞踊を披露する教育ボランティア



表Ⅱ-1-9 学生から教育ボランティアへの質問「健康生活支援学概論（平成19年度）」

- ◆ 毎日、どのような生活をされていますか。
- ◆ 例えば、昨日の24時間（一日何をされていたか）を教えてください。
- ◆ 家族について教えてください。
- ◆ 学園都市にいつ頃来られましたか。
- ◆ この町について教えてください。
- ◆ 今までの簡単な歴史（どこで生まれ、大きくなり、戦争体験、仕事や家族の世話のことなど）を聞かせてください。
- ◆ 今と違う、昔の生活はどのようなものでしたか。
- ◆ 阪神・淡路大震災のときはどうでしたか。
- ◆ 地域での民生児童委員の仕事について教えてください。
- ◆ 今までに大きな病気や怪我をされたことがありますか。そのとき、一番困ったことはどんなことですか。

② 平成20年6月10日（火）2限目「健康生活支援学概論」（対象：1年生80人）

平成19年度に、教育ボランティア（ゲストスピーカー）として招いた、2人の民生児童委員を再び招いて授業を行った。今回は、学園都市地区の民生児童委員の活動の一つである「すくすく訪問」について、準備した資料をもとに、わかりやすい話を聞くことができた。「すくすく訪問」は、乳幼児のいる家庭を訪問し、子育ての悩みやニーズを聞き、また育児に役立つ情報を提供するために、平成16年から開始された。これは西区の保健師との協働の取り組みであり、西区以外にも広めるために、講演活動など、忙しく活動しているということであった。昨年同様、教育ボランティアから、学生の質問に答えるかたちで話を聞くことができた。学生にとって、地域で暮らす人々の健康生活について考える貴重な機会となった。

授業の最後には、リクエストに応じて、昨年と同様に、女性の教育ボランティアが美しい踊り（日本舞踊）を披露した。

(2) 教育ボランティアを導入した授業における感想・意見（「健康生活支援学概論」）

地域の民生児童委員を教育ボランティア（ゲストスピーカー）として招いた「健康生活支援学概論」の授業について、「平成19年度の授業」および「平成20年度の授業」における学生の主な感想・意見を、表Ⅱ-1-10、図Ⅱ-1-1にそれぞれ示した。

表Ⅱ-1-10 学生の主な感想・意見「健康生活支援学概論（平成19年度）」

- ◆ 生きがいをもち、生き生きと元気に生活している姿が素敵だった。
- ◆ 自ら活発に動いていく気持ちの大切さを学んだ。
- ◆ 皆が生き生きと過ごせるように、自分にできることを考え、行動していきたい。
- ◆ 多趣味ですごいと思った。
- ◆ 野菜が自分たちの体にどう影響するか考えさせられ、野菜を多くとる方法を知れた。
- ◆ 地域の人々が子どもの教育に対して熱心であることが印象的であった。
- ◆ この町について知ることのできる、とてもよい機会となった。
- ◆ 高齢者の日常や地域のつながりについてなど、ふだんの授業では知ることのできない「声」が聞けて勉強になった。

### 地域の人から信頼される民生委員

民生委員の守秘義務がわかった

民生委員は住民に信頼される人柄であることが必要

### 地域には子育てのサポートがある

すくすく訪問を、自分も将来利用したい

すくすく訪問は西区だけ、自分も将来利用した

近隣の人たちで子育てができるのは素晴らしい

母親にとってこのような活動は助けになるだろう

### 新たな学園都市の発見

子育て支援の活動が学園都市でおこなわれていることがわかった

普通の学園都市と違う面が見れてよかった

とても良い街だと改めて思った

### 高齢者への尊敬

人生の生き方への示唆が得られた

2人の生き方が素晴らしい

自分も将来2人のように生きたい

2人の生き方がとても有意義

趣味や生きがいの素晴らしさ

踊りが素敵

野菜作りと踊りが素晴らしかった

世代の違う方の人生の話聞いて興味ぶかった

### 看護への決意

看護学への示唆が得られた

地域の交流の大切さ

世代の異なる住民の交流が大切

高齢者や学生、転入者などの交流が大切

田舎と違って都会は人との交流が少ないので、活動が必要

地域での福祉の重要性

民生委員の重要性がよくわかった

福祉は大事ななと思った

地域の健康を守る民生児童委員の活動は重要である

看護師への言葉として、一言あるだけでうれしいと言われたことを忘れないでおきたい

### 今後の学生としての自分の決意

地域のことを知る必要性

地域の活動を全然しなかった

地域で活動するには地域の特徴をよく知る必要がある

自分も人とかかわってみたい

自分もボランティア活動に参加してみようと思った

積極的に人とかかわっていきたい

学生ももっと地域の人と交流ができたらいと思う

図 II-1-1 「学生」の主な感想・意見「健康生活支援学概論（平成20年度）」

### (3)教育ボランティアを導入した授業の成果（「健康生活支援学概論」）

2年にわたり、地域の中で活動している民生児童委員を教育ボランティアとして招き、生活や生きがいについての話を聞くことにより、学生自身が自分の生活を振り返り、健康生活を支援していく看護のあり方や地域の助け合いやつながりについての理解が深まった。また、民生児童委員の具体的な活動や苦勞話を聞いて、学生は、地域の人から信頼される民生児童委員の重要性や地域の子育て支援の実践について学ぶことができ、地域への関心も深まった。さらに、教育ボランティアとして招いた2人の民生児童委員が、地域での活動を生きがいとし、また、趣味をもちながら生き生きと生活する生き方に、尊敬の念を抱いたようであった。

今回、地域の民生児童委員を教育ボランティア（ゲストスピーカー）として招いた授業を通して、学生は、人との交わりやボランティア活動の重要性に気づき、地域で健康を守るためには、住民の交流や住民同士の助け合いと専門職との協働が必要なことを学んだ。さらには、住民に信頼される看護職の姿勢とはどういうことかについても学ぶことができたといえる。

一方、教育ボランティアとして招いた2人の民生児童委員が、学生の感想文を読んだ際、自分たちの話したことを学生が真剣に聞いてくれたことに、とても喜びを感じていた。教育ボランティアにとっても、若い世代に自分たちの思いを伝える機会となり、意義深い時間になったといえる。

## 4) 老年健康生活支援論

### (1)教育ボランティアを導入した授業の実績（「老年健康生活支援論」）

「老年健康生活支援論」においては、教育ボランティアとして、老年期の地域住民を招き、「これまでの人生をどのように生きてきたのか」「現在、生きがいに行っていること」「健康な生活を維持するために生活の中で工夫していること」「これまでの生き方が自己の生活の中でどのように生かされているのか」などについて話を聞き、高齢者の健康生活支援のあり方について学生個々が考えられるように指導した。

また、教育ボランティアには、戦争体験をふまえて「学生に伝えたいこと」を述べてもらい、さらに、これからの人生に向けての希望や期待を、「次世代への期待」に重ねて感じてもらうことによって、今後、教育ボランティア自らが健康に生きていくことへの支援となるような関わりに重点をおいて授業を展開した。

「老年健康生活支援論」の授業では、平成18～20年度の各年度に、それぞれ1回（計3回）、老年期の地域住民を教育ボランティア（ゲストスピーカー）として招き、授業を行った。各年度とも、教育ボランティアには、事前に2～3回、大学に招き、授業の趣旨説明や打ち合わせを行い、授業を効果的に展開するための工夫を重ねた。教育ボランティアを導入した授業の実施日時と教育ボランティアの内訳は、以下の①～③のとおりである。

① 平成18年11月13日（月）5限目「老年健康生活支援論」（対象：1年生）

・教育ボランティアの人数：2名（男性A氏[85歳]、女性B氏[77歳]）

② 平成 19 年 11 月 8 日（木）5 限目「老年健康生活支援論」（対象：1 年生）

・教育ボランティアの人数：2 名（男性 A 氏[86 歳]、女性 B 氏[78 歳]）

③ 平成 20 年 11 月 17 日（月）4 限目「老年健康生活支援論」（対象：1 年生）

・教育ボランティアの人数：1 名（男性 C 氏[79 歳]）

(2) 教育ボランティアを導入した授業における感想・意見（「老年健康生活支援論」）

① 学生の感想・意見「老年健康生活支援論」

老年期の地域住民を教育ボランティア（ゲストスピーカー）として招いた「老年健康生活支援論」の授業において、受講学生は、「感想シート（A4 版 1 枚）」に、多くの感想や意見を記述していた。

i. 平成 18 年度における学生の主な感想・意見をふまえて

平成 18 年度の授業について、学生の受講態度は、健康にいきいき生きる高齢者の話に興味をもって参加している者が多かった。授業後の学生の感想シートには、主に「戦争体験、食糧難」「昔の仕事の大変さ、リアリティのある話」「高齢者は弱いというイメージが変化」「目標を持って人生を生き抜くことが健康につながる」「人のために働くという信念の大切さ」「健康のために必要なこと、体を使っていきる、前向きに生きる、笑顔が素敵」などが記述されており、健康に老いることの秘訣や、生き方を、多くの学生が学んでいた。感想は用紙（A4 版 1 枚）いっぱいを使って書かれたものが多く、多くの刺激を受けた授業であったといえる。

ii. 平成 19 年度における学生の主な感想・意見

平成 19 年度の授業における学生の主な感想・意見は表 II-1-11 に示したとおりである。

表 II-1-11 学生の主な感想・意見「老年健康生活支援論（平成 19 年度）」

- ◆貴重な話が聞けてよかった。
- ◆素晴らしい話を聞くことができた。忙しい中、学校に来てくれたことに感謝している。
- ◆本当に大きな人生経験をなされたのだなあとと思った。
- ◆逆に元気をいただいた気がする。
- ◆少し自分自身が成長できたように思う。
- ◆健康に生きる高齢者はやはり“Active”だと感じた。
- ◆楽しそうに生き生きと話されている姿に、長生きも悪くないかなと思った。これからはずっとこのまま元気でいてほしいと思った。
- ◆自分の祖父母の人生の話を聞いたりして、健康に老いる術を学ぼうと思った。
- ◆もっと祖父母と話したい、もっと優しくなりたいたと思った。
- ◆高齢者からは学ぶことが多く、また勇気付けられることもたくさんあると思った。
- ◆高齢者の人生を全て理解し、同じような思いを抱くことは難しいと思った。
- ◆自分が思うほど「聴く」ことは簡単ではないと感じた。しかし、自分がどのように関わっていくか、その姿勢が重要だと感じた。

② 教育ボランティアの主な感想・意見「老年健康生活支援論」

授業終了後に、茶話会の形で教育ボランティアが感想を述べる時間をもった。教育ボランティアは、「大学で授業をする」という緊張はあったが、それを無事終了した達成感、若い学生に接することの刺激による高揚感をもつことができたように思う。

i. 平成 18 年度における教育ボランティアの主な感想・意見をふまえて

事前打ち合わせ、当日の授業前、終了後の教育ボランティアの反応から、若い世代の学生に「伝えたいこと」をしっかりと持っている方であることがうかがえた。教育ボランティアは、講義という慣れない場で、どこまで自分たちの言いたいことが伝わったのか、不安も感じたが、自分たちの言いたいことは伝えたという自負はもっていた。後日、教育ボランティアに、学生の感想をまとめたものと授業風景の写真を送付し、感謝の意を伝えたところ、自分たちの努力が実ったとの感覚を得られたようで、次年度も教育ボランティアとして授業に協力したいとの返事があった。次世代に高齢者が伝えたいことを伝える場を提供することは、高齢者の心理社会的な健康維持の面でも成果があったと思われる。



平成 18 年度「老年健康生活支援論」の授業風景

ii. 平成 19 年度における教育ボランティアの主な感想・意見

平成 19 年度の授業における教育ボランティアの主な感想・意見は、表 II-1-12 に示したとおりである。

表 II-1-12 教育ボランティアの主な感想・意見「老年健康生活支援論（平成 19 年度）」

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>◆若い学生の前で話す体験を、この歳になって得られたことに感謝している。</li><li>◆話したいことはたくさんあるが、うまく伝えられたか不安だった。</li><li>◆自分の生きてきた体験を話すことで、学生には何かをつかんでもらいたい。</li><li>◆大学で話をすることは、自分にとってもよい経験になった。</li></ul> |
|--|



平成 19 年度「老年健康生活支援論」の授業風景

### (3)教育ボランティアを導入した授業の成果（「老年健康生活支援論」）

平成 18 年度は初年度ではあったが、教育支援ボランティアを導入した授業は大きな成果をあげたと考える。次年度の課題として、事前の打ち合わせ、授業用資料（年表で自己紹介など）の作成など、短時間でより効果的な授業の開発を進めていく必要があることを確認した。平成 19 年度は、2 年目の新たな取り組みとして、教育支援ボランティアに、生活史年表と若い時代の写真の準備をお願いした。資料や視聴覚教材を活用したことによって、前年度より講義内容が理解しやすくなったと思われ、学生の感想も具体的な内容が増えていた。教育ボランティア（2 名）は、前年に続き 2 回目ということで、マイクの使い方や講義内容等にも慣れてきた様子であった。授業終了後、教育ボランティアは、前年と同様に、学生に何かを伝えることができたという達成感を感じられたようだった。平成 20 年度は、前年度までとは別の老年期の地域住民に教育ボランティアを依頼し、人数も 1 名に絞り、じっくりと話ができるようにした。教育ボランティアの生活史年表や写真資料の視聴覚教材化も順調に進み、授業の当日は、趣味の禅画の掛け軸や色紙を講義室に展示され、披露されたが、学生には強い印象を与えた。

3 年間にわたって行った「老年健康生活支援論」の授業に、教育ボランティア（ゲストスピーカー）を導入する試みは、取り組みの目的を十分に達成したと考える。教員のみによる授業ではなく、老年期を健康に生きる高齢者自身による授業は、話の内容もさることながら、いきいきとして生きる姿そのものへの出会いによって、学生に、言語的なメッセージだけではなく「健康に老いるリアリティ」を感じ取らせていた。教育ボランティアの生活史年表、写真、資料などをパワーポイントで提示することは、それを補完する効果をもたらしたと思われる。これらの準備は、教員が、事前に教育ボランティアとの打ち合わせを通じて、その人を深く理解することから始まる。教員は、教育ボランティアへの聞き取りをしながら年表作成を手助けし、パソコンを用いてパワーポイントの教材を作成する作業を協働で進めていく。これらの協働作業は、教育ボランティア自身が自己の人生を客観的に見つめる機会ともなり、教育ボランティアにとっても有意義であったと考えられる。

教育ボランティアには、当該授業の内容についての理解、一定程度の話術、伝える力などが必要となるが、地域住民の中には、これまでの人生において、そのような力量を開発してきた経験をもつ高齢者は多く存在すると考えられる。今回の成果から、教育ボランティアは高齢者にとっても有意義であることがわかった。今後は、できるだけ多くの地域の高齢者が授業に参加する機会をつくっていくことが重要である。



平成 20 年度「老年健康生活支援論」の授業風景

## 5) 小児健康生活支援論 I

### (1) 教育ボランティアを導入した授業の実績（「小児健康生活支援論 I」）

「小児健康生活支援論 I」においては、平成 18～20 年度の各年度に、それぞれ 1 回（計 3 回）、教育ボランティアとして、地域に住む乳幼児とその母親を招き、子どもの健康生活に関する話（体験談など）を聞いた。また、学生は、母親の協力のもと、乳幼児とふれあう体験（子どもとの遊び、抱っこ等）をした。教育ボランティアを導入した授業の実施日、実施場所、教育ボランティアの内訳、対象学生は、以下の①～③のとおりである。

#### ① 平成 18 年 12 月 15 日（金）「小児健康生活支援論 I」

- ・実施場所：神戸市看護大学 西館および北館
- ・教育ボランティア：乳幼児と母親 2 組（7 カ月児 1 名、10 カ月児 1 名）
- ・対象学生：1 年生 80 名および編入 3 年生 10 名、計 90 名

#### ② 平成 19 年 12 月 7 日（金）「小児健康生活支援論 I」

- ・実施場所：神戸市看護大学 西館および北館
- ・教育ボランティア：乳幼児と母親 4 組  
(6 カ月児 1 名、10 カ月児 2 名、1 歳 10 カ月児 1 名)
- ・対象学生：1 年生 81 名および編入 3 年生 31 名、計 112 名

#### ③ 平成 20 年 12 月 15 日（月）「小児健康生活支援論 I」

- ・実施場所：神戸市看護大学 西館および北館
- ・教育ボランティア：乳幼児と母親 4 組  
(4 カ月児、5 カ月児、1 歳 10 カ月児、2 歳 2 カ月児)
- ・対象学生：1 年生 90 名



「小児健康生活支援論 I」の授業風景（左：平成 18 年度、右：平成 19 年度）



「小児健康生活支援論 I」における乳幼児とのふれあい体験（平成 18 年度）



「小児健康生活支援論Ⅰ」における乳幼児とのふれあい体験（平成19年度）

(2)教育ボランティアを導入した授業における感想・意見（「小児健康生活支援論Ⅰ」）

地域に住む乳幼児とその母親を、教育ボランティアとして招いて行った「小児健康生活支援論Ⅰ」の授業における、教育ボランティアおよび学生の主な感想・意見を、以下の表Ⅱ-1-13、表Ⅱ-1-14にそれぞれ示した。

表Ⅱ-1-13 教育ボランティアの主な感想・意見「小児健康生活支援論Ⅰ」

<平成18年度>

- ◆自分の体験したことが何かの役に立てばと思い参加した。学生は、とっても生き生きとしていてよかった。今後もこの教育ボランティアに参加したいと思う。
- ◆子どもがいろいろな人に抱っこされたらいいなと思って参加した。学生は熱心な人と遠慮がちな人がいた。今回の教育ボランティアに参加して、自分が地域で役に立っていると実感できた。今後も教育ボランティアに参加したいと思う。

<平成19年度>

- ◆学生は熱心にメモを取っていたし、ふれあい体験では息子に興味をもって接してくれ、嬉しかった。また、他のお母さんの話を聞くことで、これから体験することがわかり、私自身も勉強になり、よかった。
- ◆学生はとっても真剣で、子どもに興味のある学生が多かったように思う。今回の教育ボランティアに参加して自分が地域で役に立っていると実感できた。

<平成20年度>

- ◆違う月齢のお子さんをもつお母さんの話を聞いてよかった。みんな（学生）、子どもに興味を示し、必死にあやそうとしてくれて一生懸命さを感じた。
- ◆子どもにたくさんの人と触れ合っただけだったので、よかった。
- ◆学生の子どもへの関わりは、積極性のある学生もいたが、子どもが来るのを待っていて、来たらすぐに対応するという感じの学生が多かったように思った。フレッシュな感じがした。



表Ⅱ-1-14 学生の主な感想・意見「小児健康生活支援論Ⅰ」

<平成 18 年度>

- ◆母親に話を聞くことができ、接することができたことは大変よかったです、話してくれたことは将来役に立つと思った。母親の「腹立つことも確かにあるけど、この子が大好きです」という言葉に感動した。
- ◆2人の母親にお話を聞いて、個人個人で体験が全く違うのだと感じた。赤ちゃんとお母さんを見て、あんなに小さいのに凄く元気に動いているし、何にでも興味津々で、すごくかわいかった。赤ちゃんはいつでも母親を捜していて、母親とのつながりを感じた。また、母親の観察力は凄いと思った。
- ◆子どもの成長とともにいろいろ工夫したり、楽しみながら子育てをしている姿は魅力的だった。おむつ交換をさせてもらって、よい経験になった。
- ◆母親が安心して子育てができるように、看護師は知識をもって、子ども一人一人に合わせて支援することが大切だと思った。
- ◆赤ちゃんに触らせてもらおうと、幸せな気分になった。子どもがほしいと思った。

<平成 19 年度>

- ◆子育て中の母親の話を聞いたのは初めてで、どんなことに悩み、楽しんでいるのかを具体的に知ることができた。
- ◆3人それぞれ子育ての仕方や考え方が異なっていたけど、それぞれ思っているやり方でたくさんの工夫をされ、子育てを楽しまれていることがわかった。
- ◆最初から母親というわけではなく、子どもと一緒に母親として成長していくことがわかった。
- ◆周りの大人が大切に育てているからこそ、子どもは成長・発達しているのだと思った。
- ◆反抗期の様子やコミュニケーションの難しさなど、大変だったこと、その反面、子育ての魅力、楽しさなど、とても貴重な話を聞くことができた。
- ◆直接、地域で生活している親子の様子や意見を聞くことができてよかった。今後、私たちが係わる患者には、様々な背景があり、様々な環境で過ごしていることを意識して関わっていきたい。
- ◆赤ちゃんを抱っこさせてもらい、とてもかわいかった。
- ◆もう少しグループの人数が少ないほうが、お母さんと話しやすいと思った。

<平成 20 年度>

- ◆普段、乳幼児の母親の話を聞く機会はなかなかないので、すごくよい時間だった。
- ◆乳児期と幼児期で、こんなにも（発達に）差が出てくることにまず驚いた。
- ◆乳児期・幼児期というのは成長も早くて、昨日までできていなかったことが今日できるようになったとか、親の喜びはとても大きいものだった。
- ◆子どもと実際にふれあってみて、とてもかわいかった。
- ◆おむつ交換もさせてもらったが、パンツタイプのおむつをするとき、赤ちゃんが自分で足を上げてくれたりしたので、しやすかった。
- ◆自分にはきょうだいもいなくて、親戚にも小さい子がいないので、あんなに小さい子に触れたのは、ほぼ初めての体験だった。
- ◆数ヶ月の違いでも成長面では差があるので、子どもの成長の早さを感じた。
- ◆思っていた以上に手足の力が強く、しっかりと握ってくれたり、床を蹴ってジャンプしているのがすごかった。
- ◆赤ちゃんを抱っこさせてもらい、とてもかわいかった。
- ◆実際に赤ちゃんともふれあって言葉にはしなくても「今喜んでいるのだ」とか「ちょっと疲れたのかな」などと、表情から感情が伝わってきた。
- ◆話を聞くと、それぞれの月齢で何ができるのかがよくわかってよかった。
- ◆赤ちゃんを見ていると、いろいろな発見があって、本当に楽しかった。
- ◆私が赤ちゃんの頃もこんなに手がかかったのだろうなと思うと、親に感謝しなくてはいけないと感じた。
- ◆もう少し少人数でふれあい体験ができればよかった。
- ◆もう少しふれあいの時間がほしかった。

### (3)教育ボランティアを導入した授業の成果と課題（「小児健康生活支援論Ⅰ」）

小児看護学領域の最初の授業である「小児健康生活支援論Ⅰ」に教育ボランティアを導入する目的は「学生が小児看護学に興味・関心を持つこと、実際の乳幼児を観察すること、母親から乳幼児の生活や子育ての話聞くことにより、今後続く授業内容の理解を促すこと」であった。平成18年度は「小児健康生活支援論Ⅰ」の第2回目の授業として、平成19年度は第3回目の授業として、平成20年度は第4回目の授業として、教育ボランティアを導入した授業を行った。

先述の学生の様子や感想に加えて、学生の授業評価アンケートの結果からも、今回、教育ボランティアを導入した「小児健康生活支援論Ⅰ」の取り組みは有効であることが明らかになった。平成18年度は、月齢の異なる乳児の母親から話（体験談など）を聞いたり、実際に乳児とふれあうことにより、乳児期の急激な成長・発達についての学生の理解を促すことができた。平成19年度以降は、乳児だけではなく幼児も加え、発達段階の異なる乳幼児とその母親4組を教育ボランティアとして授業に導入した。その結果、乳幼児の成長・発達の違いと子どもの発達段階の違いによる子育ての仕方の変化についての学びが得られた。さらに乳幼児と家族への看護についても考える機会になっていた。このように、乳幼児とその母親を教育ボランティアとして導入した授業は、学生の学びの深まりと学習意欲の動機づけにつながったと考えられる。また、授業中の教育ボランティアの様子や授業後の感想などから、教育ボランティアである母親への子育ての支援にもつながっていたと考えられる。

ここで、「小児健康生活支援論Ⅰ」で教育ボランティアを導入した授業の課題として、教育ボランティアを依頼する親子の人数と授業の実施時期や時間帯について述べる。

まず、教育ボランティアとして授業に参加する親子の人数について、平成18年度の授業では、乳児とその母親2組であった。最初に、月齢が異なる乳児をもつ2名の母親がそれぞれ20分程度の講演を行い、その後、学生は親子と40分程度、ふれあう体験をした。その際、親子の人数が少なかったため、乳児をもつ教員親子1組が加わり、90名の受講学生が3グループ（1グループ30名程度）に分かれてふれあい体験を行った。平成19年度は、学生が親子と直接ふれあう機会を少しでも増やすために、乳幼児とその母親4組の教育ボランティアを導入した。月齢の異なる乳幼児をもつ3名の母親がそれぞれ20分程度の講演を行ったが、その結果、その後のふれあい体験の時間が少なくなった。授業後、学生から「ふれあい体験の時間が短い」との意見が多く聞かれた。そのため、平成20年度は、乳幼児とその母親4組を教育ボランティアとして導入したが、そのうち講演は2名の母親に依頼し、それぞれ20分程度の講演を行った。それにより、学生から「ふれあい体験の時間が短い」との意見がほとんど聞かれなくなった。

今回の結果から、母親の講演は2名が適当と考えられる。また、ふれあい体験については、学生数が多いため、ふれあい体験に参加してくれる親子の教育ボランティアを増やしたほうが、学生の満足度や学びは深まると思われる。しかし、今回の経験からも、現実的に乳幼児とその母親を教育ボランティアとして得ることは難しい。また、今回、小児看護

学の教員（4名）が、ふれあい体験のグループ（4グループ）に1名ずつファシリテーターとして入ることにより、効率的にふれあい体験を行うことができたと考えられる。これらのことから、ふれあい体験に参加してくれる親子は4組が適当と考えられる。

次に、授業の実施時期や時間帯について述べる。今回、「小児健康生活支援論Ⅰ」は、時間割の関係上、後期後半（冬の寒い時期）に位置づけられた授業であった。この時期は、教育ボランティアとして参加する乳幼児とその母親にとって、体調不良などを起こしやすい時期であり、突然の参加辞退も予測されるため、効果的な授業を行うためには、授業の実施時期の配慮や突然の参加辞退に備えた柔軟な体制が必要である。また、平成18年度、平成19年度の授業は、時間割の関係で、午前の時間帯に行ったが、平成20年度は午後の時間帯に行った。平成20年度の授業の際、教育ボランティアから、子どもの昼寝の時間帯に重ならないように、できれば午前中の時間帯にしてほしいとの意見が聞かれた。そのため、乳幼児の生活スタイルを考慮して授業の時間帯を配置することも必要である。

## 6) 健康生活支援技術演習

### (1) 教育ボランティアを導入した授業の実績（「健康生活支援技術演習」）

「健康生活支援技術演習（旧カリキュラム：コミュニティヘルスケア）」において、教育ボランティアを導入した授業では、学生が健康教育を企画・実施する演習を行った。具体的には、学生はグループに分かれて、将来、臨地実習としての健康生活支援学実習Ⅱ（旧カリキュラム：地域看護学実習）を行うフィールドである神戸市各区の健康課題を明らかにし、その健康課題に応じた健康教育（模擬講習）を企画・実施する演習である。この健康教育の実施にあたり、その受け手として地域住民による教育ボランティアを導入した。健康教育のテーマは、各区の健康課題に応じて、学生がグループごとに自由に設定したが、「子育て」「妊娠期の過ごし方」「生活習慣病予防」「健康づくり」「介護予防」「結核予防に関すること」など様々であった。教育ボランティアに依頼した内容は、学生が実施する各グループの健康教育に受け手として参加し、「内容がわかりやすかったか」「資料が見やすかったか」「実施態度はよかったか」「聞き取りやすかったか」「家に帰って実践してみたい、人に伝えたいなどと思ったか」「感想」などについて、コメントを述べてもらうことであった。なお、健康教育の時間設定は、1グループにつき、健康教育の実施15分、教育ボランティアからのコメント10分であった。

教育ボランティアを導入した授業の実施日、教育ボランティアの人数、対象学生は、以下の①～③のとおりである。

#### ① 平成19年1月30日（火）「コミュニティヘルスケア（旧カリキュラム）」

- ・教育ボランティアの人数：13名
- ・対象学生：3年生および編入3年生（計117名）

#### ② 平成20年2月4日（月）「コミュニティヘルスケア（旧カリキュラム）」

- ・教育ボランティアの人数：38名
- ・対象学生：3年生および編入3年生（計120名）

### ③ 平成 20 年 7 月 23 日（水）「健康生活支援技術演習」

- ・教育ボランティアの人数：29 名
- ・対象学生：3 年生（80 名）

なお、「健康生活支援技術演習」は、平成 18 年度からスタートした本学の新カリキュラムで新たに立てられた授業科目であるが、3 年生に担当された科目のため、実際には、平成 18 年度入学の学生が 3 年生になる平成 20 年度から始まった。したがって、平成 18 年度および 19 年度においては、教育ボランティアを導入した授業は、旧カリキュラムの「コミュニティヘルスケア」の授業の一環として行った。



「健康生活支援技術演習」の授業風景

### (2) 教育ボランティアを導入した授業における感想・意見など（「健康生活支援技術演習」）

#### ① 学生へのアンケート結果「健康生活支援技術演習」

健康教育の受け手として地域住民による教育ボランティアを導入した「健康生活支援技術演習」の授業における、学生へのアンケート結果について、以下に述べる。

学生へのアンケートは、平成 18 年度、19 年度とも、各授業終了後に実施した。その結果、平成 18 年度には 108 名、平成 19 年度には 104 名の学生から回答が得られた。平成 18 年度の結果は図Ⅱ-1-2、平成 19 年度の結果は図Ⅱ-1-3、平成 18 年度および 19 年度の主な自由記載内容は表Ⅱ-1-15 にそれぞれ示した。

健康教育の受け手として住民による教育ボランティアが参加したことについて、平成 18 年度、平成 19 年度ともに、すべての学生が「良かった」または「やや良かった」と思うと答えていた。また、平成 18 年度、平成 19 年度ともに、教育ボランティアの参加により「臨場感がある」「やりがいがある」「張り合いになる」「企画・準備に力が入る」という回答した学生は、「そう思う」「ややそう思う」を合わせて 80%以上であった。一方で、教育ボランティアの参加が「負担だった」という回答をした学生は、「そう思う」「ややそう思う」を合わせて、平成 18 年度では約 3 割、平成 19 年度では約 4 割いたものの、教育ボランティアの参加により「健康教育の実施が嫌になった」と答えた学生は、平成 18 年度、平成 19 年度ともにほとんどいなかった。また、「教育ボランティアからのコメントが参考になった」と答えた学生は、「そう思う」「ややそう思う」を合わせて 95%以上であった。

教育ボランティアの人数について、平成 18 年度では、教育ボランティアの参加者が 13

名と少なかったため、「適当と思わない」「やや思わない」と答えた学生がほぼ半数いたが、平成 19 年度では、教育ボランティアの参加者が 38 名となり、8 割以上の学生が「適当な人数である」と回答していた。

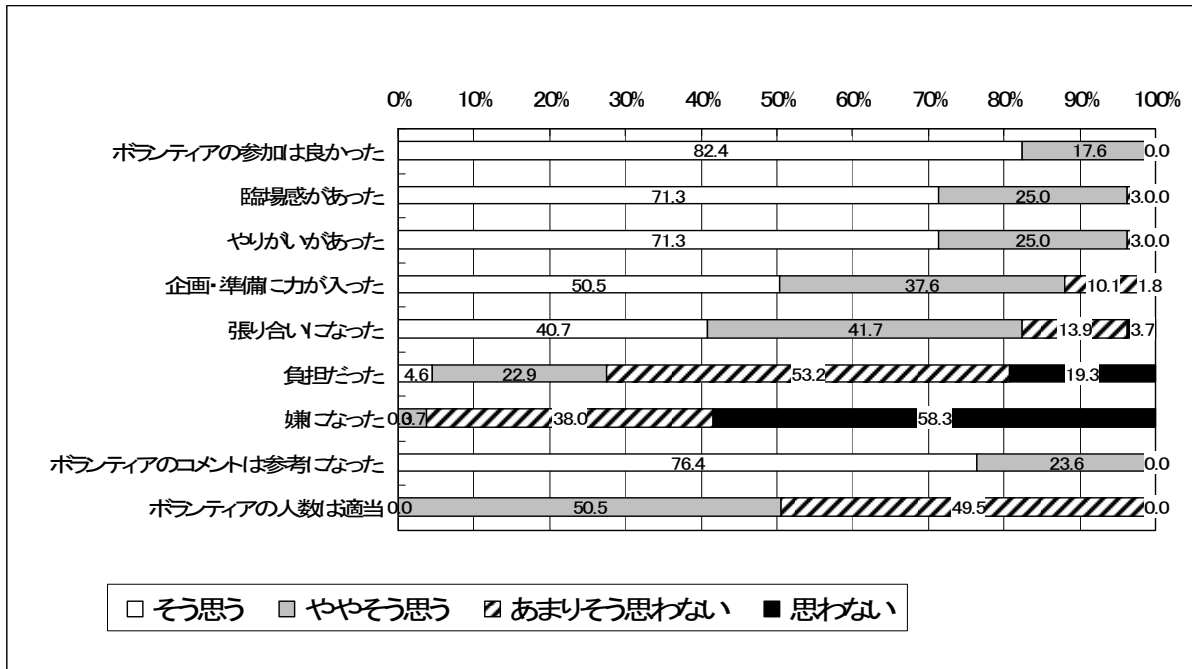


図 II-1-2 学生へのアンケート結果「健康生活支援技術演習（平成 18 年度）」

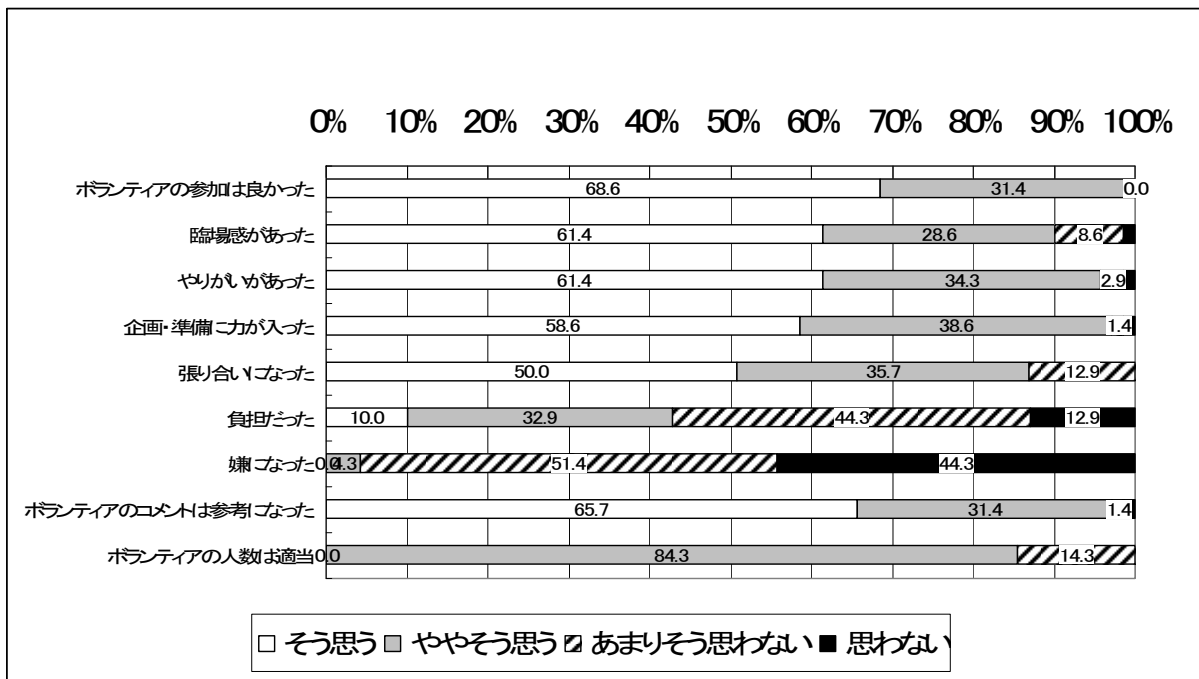


図 II-1-3 学生へのアンケート結果「健康生活支援技術演習（平成 19 年度）」

表Ⅱ-1-15 学生へのアンケート結果の主な自由記載内容「健康生活支援技術演習」

- ◆ ボランティアに参加しているというだけに、健康意識が高い人が多く、また、自身や身内が病気、あるいは病気によって亡くなったという人が多かったので、真剣に聞かれ、質問もたくさんされ、学ぶことが多かった。とてもよい企画だと思った。
- ◆ 教育ボランティアの意見が非常に参考になったので、やってよかったと思った。
- ◆ 教育ボランティアが意見を言ってくれてよかった。
- ◆ 人に教育するということの難しさを改めて感じた。教育ボランティアの意見で、どのようなことに疑問をもつかなどもよくわかり、参考になった。
- ◆ 実際の地域住民である教育ボランティアからの質問は、本当に勉強になった。今後の学習に活かしていきたい。
- ◆ 学生の視点からしか見えていなかったが、実際に経験をした人の意見や高齢者の深い意見をきくことができ、とてもよかった。
- ◆ 教育ボランティアが、私たちが見えていなかったところを指摘してくれ、よく理解でき、気づけてよかった。
- ◆ 教育ボランティアに実際に説明をするため、その責任感がやりがいにつながった。
- ◆ 人によって知識に差があるので、地域での健康教育は難しいと思った。
- ◆ 教育ボランティアは意識が高い人が多く、もっと勉強しておけばよかった感じた。人に教育をするということは、自分が知っているとか、言いたいとかいうことを伝えて終わりではなく、その人の反応、質問などに合わせて情報を提供していくことが、大切なのだと気づいた。
- ◆ 結構深いところまで質問があり、自分達の知識がまだまだ足りないと思った。
- ◆ もっと知識が必要だと思った。
- ◆ 教育ボランティアは、みんな健康に対する知識が高いと思った。
- ◆ 教育ボランティアの健康への意識がとても高く、圧倒されたが、そのおかげもあり、質問や意見が多く出て、とても興味深く、勉強になり、また、楽しかった。

## ② 教育ボランティアへのアンケート結果「健康生活支援技術演習」

健康教育の受け手として教育ボランティアを導入した「健康生活支援技術演習」の授業における、教育ボランティアへのアンケート結果について、以下に述べる。

平成19年度に参加した38名の教育ボランティアを対象に、授業終了後にアンケートを実施した。その結果、28名(73.7%)の教育ボランティアから回答が得られた。アンケート結果は図Ⅱ-1-4に示し、主な自由記載内容は表Ⅱ-1-16にそれぞれ示した。

図Ⅱ-1-4に示したように、学生が実施する健康教育に参加して「楽しい」「役に立つ」「また参加したい」「身近に感じられた」と回答した教育ボランティアは、「そう思う」「ややそう思う」を合わせると全員であり、特に「また参加したい」「身近に感じられた」が高率であった。一方、「ボランティアが負担だった」と答えた教育ボランティアもごく少数存在した。アンケートの自由記載欄に書かれていた主な内容を表Ⅱ-1-16に示したが、学生自身が企画し、実施した健康教育の内容について「参考になった」「楽しかった」などの積極的な感想が多くみられ、また、学生に関して「熱心だった」「頼もしかった」「将来が楽しみ」などの好意的な感想が多くみられた。さらに、アンケートでは、学生が実施した健康教育の内容で、実際に自分自身の生活に取り入れたい内容について質問したが、「日常生活での運動の工夫」「ウォーキング」「食生活の改善」「その他の生活習慣の改善」など、全員が、いずれかの内容を自身の生活に取り入れたいと回答していた。

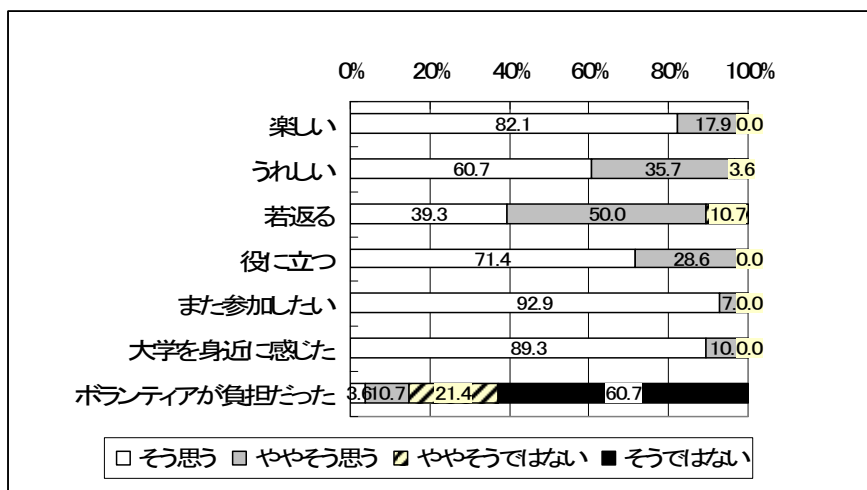


図 II-1-4 教育ボランティアへのアンケート結果「健康生活支援技術演習」

表 II-1-16 教育ボランティアへのアンケート結果の自由記載内容「健康生活支援技術演習」

【主に健康教育の内容に関して】

- ◆若い人達と一緒に学ぶことは本当によいことと思った。身近で簡単なこと、あたりまえと思っていたことでも、学生の発表を聞いて、改めて認識することができた。
- ◆楽しく参考になる点がたくさんあった。
- ◆高齢の自分の生活にも大変役に立ち、かえってありがたいと思った。
- ◆若返れてよかったが、体操が多すぎて全部できなかった。一つだけならよく覚えられたと思う。各グループでテーマが違ったほうがよいと思った。
- ◆教育対象を絞り込んだ内容で、説明内容もよくまとめられていた。
- ◆学生は皆熱心だった。与えられたテーマを、わかりやすく説明してくれ、今後の自身の生活に活かしたいと思った。
- ◆とても楽しかった。若い人たちと笑っていられる時間が楽しかった。
- ◆内容が明るく楽しくなるように考えられていて、よかったと思った。

【主に学生に関して】

- ◆学生の真しで誠実な発表に心打たれた。将来の心配も少しなくなった気がする。
- ◆学生の誠実な発表ぶりに好感がもてた。
- ◆なかなかよかった。15分でよくまとめていると感心した。
- ◆マイクを向けられてドキドキした。学生はよく勉強していると思った。
- ◆学生は皆とても勉強されていて、今後このような若い人が私たちのために職につかれることをうれしく思った。
- ◆入院の経験をもつ者として、医師はもとより看護師を頼りにしていたことを思い出した。看護師や保健師が大切な仕事であることを改めて感じ、尊敬の念をもった。
- ◆学生は皆熱心で真面目な印象を受け、将来の医療に安心感を覚えた。

(3) 教育ボランティアを導入した授業の成果（「健康生活支援技術演習」）

「健康生活支援技術演習（旧カリキュラム：コミュニティヘルスケア）」の授業の一環で、学生が健康教育を企画・実施する演習に、その受け手として教育ボランティアを導入したことは、実際の企画・実施時の様子や先述のアンケート結果から考えて、学生の効果的な学習につながったと考える。同じ年代である学生同士ではなく、異世代で、しかも実際の地域住民である教育ボランティアが対象のため、学生は、「甘え」がなくなり、話し方

や教材を工夫するなど、健康教育の企画や準備に力が入ったと考えられる。教育ボランティアの参加を負担に感じる学生もいたものの、その負担感も、少しでもわかりやすく、実際に役立つ健康教育にしなければならないという責任感につながり、最終的には実施後の達成感にもつながったと考えられる。また、健康教育の実施場面でも、教育ボランティアから、直接、反応があり、疑問点の質問や改善点に関するアドバイスを受けることで、学生が企画・実施した内容について自己評価することにも繋がっていた。

一方、教育ボランティアへのアンケート結果から、学生が実施する健康教育に参加して「楽しかった」「役に立った」「また参加したい」と多くの教育ボランティアが感じており、学生は「熱心で」「頼もしく」「将来が楽しみ」などの好意的な感想が多くみられた。また、健康教育の内容を実際に自身の生活に取り入れたいと考え、新たな発見があるなど、教育ボランティア自身の学習の場としても有効であったと考えられる。さらに、教育ボランティアにとって、「大学教育に貢献しているという社会貢献の意識が高まった」「大学をより身近に感じるようになった」「学生との交流が深められた」など、二次的な効果もあったと考えられる。

## 7) 情報コミュニケーション演習

### (1) 教育ボランティアを導入した授業の実績（「情報コミュニケーション演習」）

「情報コミュニケーション演習」において、教育ボランティアを導入した授業では、インターネットを通じて自らの活動内容の広報を実際に行っている地域住民を教育ボランティア（ゲストスピーカー）として招き、体験談などを聞く機会を設けた。

教育ボランティアを導入した授業の実施日時、場所、対象学生、教育ボランティアと主な授業内容は、次のとおりである。

- ・実施日時：平成 19 年 12 月 6 日(木)2 限目「情報コミュニケーション演習」
- ・実施場所：神戸市看護大学情報処理演習室
- ・対象学生：1 年生 7 名
- ・教育ボランティア（1 名）：自らもがん患者であり、がん患者を中心とした自助グループの事務局としてホームページを立ち上げ、その活動に関してブログなどを通して広報している。
- ・授業内容：教育ボランティアから、がん患者を中心とした自助グループ（患者会）の運営、そのホームページ（ブログ）開設の経緯や運用状況、がん患者としての自身の闘病生活について、体験談を含めて話を聞いた。授業の最後には、カルチャーセンターで版画の講師もしている教育ボランティアが、自ら制作した作品を披露した。

### (2) 教育ボランティアを導入した授業における感想・意見（「情報コミュニケーション演習」）

がん患者を中心とした自助グループのホームページを運営している地域住民を、教育ボランティアとして招いて行った「情報コミュニケーション演習」の授業における、学生の主な感想・意見を、以下の表Ⅱ-1-17 に示した。



表Ⅱ-1-17 学生の主な感想・意見「情報コミュニケーション演習」

- ◆同じ病気の人同士の情報交換の手段として、紙媒体だけでなくインターネットを利用することは価値があることがわかった。
- ◆病気で苦しんでいる人同士が助け合い、支え合っているということは素晴らしいと思った。
- ◆がんにかかった人たちの想いを知ることができてよかった。
- ◆がんを告知するかしないかは難しい問題だと思った。
- ◆日頃の家族の会話の中で、がんの告知などについて話し合うことは大切だと思った。
- ◆がんによる恐怖感、不安感、無気力にさいなまれ、そういった葛藤を乗り越えて今を最大限に生きようとしていることは、毎日をのうのうと過ごしている私たちより質の高い生（生き様）だと思った。
- ◆色を組み合わせた版画が素晴らしかった。

### (3)教育ボランティアを導入した授業の成果（「情報コミュニケーション演習」）

「情報コミュニケーション演習」では、ホームページの作成技術やインターネットの利用技術を演習形式で学んでいる。しかし、単に技術を学ぶだけになりがちで、その知識や技術を実際に活用する方法について具体的に学習するまでには至らない場合が多い。今回、教育ボランティアを導入した授業は、実際に地域社会でインターネットを活用している地域住民から、その活用について体験談を交えて具体的に学ぶ良い機会であったと思われる。さらに、自らもがん患者である教育ボランティアから、患者会やがん患者の生活に関して、直接、話を聞くことができ、がん患者の現状や患者同士の助け合いについての学生の理解も深まったと思われる。

## 8) 災害看護システム論

### (1)教育ボランティアを導入した授業の実績（「災害看護システム論」）

「災害看護システム論」では、教育ボランティアを導入したトリアージ演習を行った。トリアージは、災害時などに、多数の傷病者を重症度と緊急性によって分別し、治療の優先度を決定することである。トリアージ演習は、想定された災害場面のなかで、学生が被災者とその家族、トリアージ施行者、トリアージ・アシスタントを演じることを通して、トリアージについての知識や技術を習得することをねらいとしている。今回は、教育ボランティアとして、地域住民に被災者とその家族を演じてもらうことにより、教育ボランティア（地域住民）と学生相互の学びを深めることをもう一つのねらいとした。

教育ボランティアを導入した授業の実施日時、場所、教育ボランティア、対象学生は、次のとおりである。

- ・実施日時：平成 20 年 12 月 11 日（木）（13：10～16：35）「災害看護システム論」
- ・実施場所：神戸市看護大学 学生会館および W21 講義室
- ・教育ボランティア：地域住民 10 名      ・対象学生：学生 38 名



教育ボランティアを導入した「災害看護システム論」 トリアージ演習の様子

(2)教育ボランティアを導入した授業における感想・意見など（「災害看護システム論」）

教育ボランティア（地域住民）に被災者とその家族を演じてもらった「災害看護システム論」 トリアージ演習における、学生の主な感想・意見など（学びや気づき）を、以下の表Ⅱ-1-18 に示した。また、演習後に行った、教育ボランティアへのアンケートとヒアリングの結果を表Ⅱ-1-19 に、教育ボランティアの主な感想・意見を表Ⅱ-1-20 に示した。

表Ⅱ-1-18 学生の主な感想・意見（学びや気づき）「災害看護システム論」

- ◆被災者の不安を少しでも軽減できるような援助を行う必要があると思った。
- ◆患者の声を聞くことも大事だが、重要性を判断して、惑わされないようにするのも大切だと感じた。
- ◆教育ボランティアの言葉が、嬉しかった。
- ◆被災者の家族への対応の難しさを感じた。
- ◆教育ボランティアから意見をもらい、考えさせられた。
- ◆教育ボランティアの意見は、とても客観的で参考になった。
- ◆被災者を演じた教育ボランティアから、声を出せない人にも目を向けてほしいという意見をもらい、とても参考になった。

表Ⅱ-1-19 教育ボランティアへのアンケート結果「災害看護システム論」

【教育ボランティア（10名）へのアンケートおよびヒアリングの結果】

- 演習前に「トリアージ」という言葉や内容を知っていたか否か
  - ◆知っていた：7名 ◆知らなかった：2名
- トリアージ演習に参加しようと思った理由（複数回答）
  - ◆大学教育に役立ちたい：7名 ◆トリアージに興味がある：5名
  - ◆阪神・淡路大震災を経験したから：4名 など
- 被災者やその家族役を演じて感じたこと（複数回答）
  - ◆トリアージの理解が深まった：8名 ◆被災体験を振り返る機会となった：5名
  - ◆事前情報だけでは演じるのが難しかった：3名 ◆演じてみると楽しかった：3名

表Ⅱ-1-20 教育ボランティアの主な感想・意見「災害看護システム論」

- ◆ トリアージの重要性がわかり、また、学生との交流も深まった。
- ◆ オリエンテーションで内容がよくわかってやりやすかった。
- ◆ 事前情報に関連した情報（例：転倒して左腕に傷→転倒したとき腹と頭を打って痛みがある）を伝えたが、学生が戸惑っていた。
- ◆ 「頑張る」の声掛けよりも、手を取ったり、胸に手をあてて「大丈夫よ」と安心感をもたせる言葉をかけてほしかった。
- ◆ トリアージの必要性を痛感した。表現の違いで、重病を見逃さないようにしてほしいと思った。
- ◆ 自分自身も準備不足でまごついた。学生も同様だった。
- ◆ 学生の態度はいろいろで、気を使うだけで次の手当てに行かない人もいた。将来は、気がきく（機転がきく）看護師として成長してほしいと思った。
- ◆ 実際の災害時は、突然のショックで声も出ない患者が大半である。話せない患者の表情を良く感じ取る機敏さがあればと思った。経験を積んでほしい。
- ◆ 学生も初めての経験で戸惑いもあったと思うが、一生懸命だった。
- ◆ 本番はもっと厳しい状況だと思う。演習の雰囲気比較的穏やかなのが気になった。トリアージは、命の最優先は何かとの適切な判断が必要で、大変難しいことだと思う。学生は、やはり地域のいろいろな場に望んで勉強しなくてはならないと思った。

### (3) 教育ボランティアを導入した授業の成果と課題（「災害看護システム論」）

従来のトリアージ演習では、学生同士で被災者役とトリアージ施行者を演じていたが、今回、教育ボランティア（地域住民）に被災者とその家族を演じてもらったことで、演習中の緊張感も高まり、より現実感のある演習となった。学生は被災者やその家族を演じた教育ボランティアの反応から様々なことを学び、また、教育ボランティアと協力しながら真剣に演習に取り組んでいた。

一方、阪神・淡路大震災で被災経験がある教育ボランティアにとっては、自己の体験を振り返る機会になり、同時に将来医療者をめざす学生に伝えたいことに自らが気づき、学生に伝える機会にもなっていた。教育ボランティアは、学生の反応や行動を客観的に評価する同時に、将来の医療の専門家として、学生への期待が高まる様子もうかがえた。

今後の課題として、一つは、教育ボランティアは専門家ではないので、被災状況に関する疾病やけがの状態について、血圧や脈拍の解釈、専門用語の解説など、より具体的にイメージできるよう丁寧に説明することができるように事前準備をすることである。今回は事前に30分程度のオリエンテーションを行ったが、今後はより時間をかけたオリエンテーションを計画する必要がある。もう一つは、教育ボランティアの参加人数である。まだ教員もトリアージ演習に不慣れな部分が多く、学生と教育ボランティアの動きをみながら、演習をすすめるためには、教育ボランティアの参加人数を今回のように10名ではなく、5名程度にしたほうがよいと考える。

## 9) 助産診断技術学

### (1) 教育ボランティアを導入した授業の実績（「助産診断技術学」）

「助産診断技術学」の目的は、妊産褥婦や各ライフステージにおける女性を対象に、看護診断や助産診断を行なうために必要な概念や基礎理論について、さらに助産過程の考え方について教育することであり、妊娠・分娩・産褥のプロセスの開始を診断し、正常に経過しているかを確認し、正常からの逸脱を早期に発見するための審査・診断の原理・目的・プロセス・援助方法を、全 60 回の授業で学ぶ内容となっている。

この「助産診断技術学」の授業の一環で、学生は、妊娠・分娩・産褥期の女性に対する保健指導のロールプレイを行っている。今回、このロールプレイを行う授業において教育ボランティアを導入し、実際に妊娠期および産褥・子育て期にある地域住民女性に、保健指導や妊婦健診を受ける妊婦・褥婦役を依頼した。

教育ボランティアを導入した授業の実施日時、教育ボランティアの人数、対象学生、授業内容は、以下の①～③のとおりである。

#### ① 平成 20 年 4 月 28 日 1 限目「助産診断技術学」

- ・教育ボランティアの人数：妊娠後期の妊婦 1 名
- ・対象学生：学生 15 名
- ・授業内容：妊娠期保健指導のロールプレイ

**【授業の概要】** 教育ボランティアを導入する授業に先だって、15 名の学生が、妊婦を対象にした保健指導を想定したテーマを各々設定し、3 時限（90 分×3 回）の事前授業を行った。この授業は、助産師の行う小集団教育や保健指導の学習の一環として、知識面のみならず、指導態度や指導技術に関する自らの課題を明確にすることが目的であり、次のように進めた。i) 保健指導に用いるパンフレットを作成し、指導の根拠を示すための資料を準備する。ii) 学生が妊婦役となり、作成したパンフレットと資料をもとに、質疑応答を含むロールプレイ形式で発表（15 分）を行う。その後、発表者、妊婦役、他の学生が、それぞれ意見や感想などを述べる。iii) 意見や感想を受けて、パンフレットを修正する。このような一連の授業の直後に、教育ボランティアを導入した授業を行った。まず、教育ボランティアには、各学生が作成・修正した保健指導用のパンフレットを事前に見てもらい、その中から妊婦として関心の特に高いテーマを 1 つ選んでもらった。本授業では、選ばれたパンフレットを作成した学生が発表者となり、教育ボランティアである妊婦を相手に、保健指導（テーマ：浮腫）のロールプレイを行った。

#### ② 平成 20 年 5 月 8 日 4 限目「助産診断技術学」

- ・教育ボランティアの人数：妊娠初期の妊婦とその第 1 子 1 組
- ・対象学生：学生 15 名
- ・授業内容：妊婦健診のロールプレイ

**【授業の概要】** 本授業に先立って、学生が 5 名ずつ 3 グループに分かれ、教員を妊婦役にして妊婦健診の実技を確認する授業を受けた。その後、本授業では、妊娠中期の妊婦が第 1 子を連れて健診を受ける場面を想定し、各グループの代表 1 人が、教育ボラ

ンティア（実際の妊婦とその第1子）を相手に、子宮底長・腹囲の測定、血圧測定、浮腫の観察、レオポルド触診、胎児心拍観察を行った。

③ 平成20年10月22日2限目「助産診断技術学」

- ・教育ボランティアの人数：3か月児とその母親1組
- ・対象学生：学生14名
- ・授業内容：育児相談のロールプレイ

【授業の概要】乳児の身体計測と、乳児を連れての外出をテーマとし、学生の代表1名が、教育ボランティア（実際の産後3か月の母児）を相手に、保健指導のロールプレイを行った。その後、教育ボランティアを交えて、学生全員で、乳児を連れての外出の困難さと、事前にその困難さや不安を軽減できる方法について、ディスカッションを行った。

(2) 教育ボランティアを導入した授業における感想・意見など（「助産診断技術学」）

妊娠・分娩・産褥期の女性に対する保健指導のロールプレイの受け手として教育ボランティアを導入した「助産診断技術学」の授業における、学生の主な感想・意見を以下の表Ⅱ-1-21に、教育ボランティアの主な感想・意見を表Ⅱ-1-22に示した。

表Ⅱ-1-21 学生の主な感想・意見「助産診断技術学」

- ◆妊婦の生の声（妊娠して不安なこと、前向きになろうと日々努力していることなど）が聞け、妊婦への理解が深まった。
- ◆保健指導で自分が当初予想していた点とは違う角度からも質問されることがわかった。妊娠中には、聞きたいことがたくさん出てくることわかった。
- ◆どのような姿勢や態度で話すことが妊婦のリラックスにつながるかがわかった。
- ◆第1子をつれて健診を受ける経産婦は、第1子が気になって、助産師から聞いた話もすべてゆっくり理解できる状態ではないことや、時間を短かめに要領の良い保健指導が求められることがわかった。
- ◆自分の手で妊婦を触ることの責任や感動が理解できた。
- ◆子育て期の大変さが具体的にイメージでき、分娩後の入院中から、退院後の生活を見越した保健指導やアドバイスが必要なことがわかった。

表Ⅱ-1-22 教育ボランティアの主な感想・意見「助産診断技術学」

- ◆今回参加して、学生が一生懸命に助産師を目指していることがわかった。
- ◆胎児の成長を一緒に喜んでもらえ、授業や教育ボランティアということを超えて、とても嬉しくなった。
- ◆不安になる母親を助けられる助産師になってほしい。
- ◆妊娠・出産・子育てを通じて、自分に何か学生の役に立つことがあればいいなという思いで参加したが、逆に学生から元気もらった。参加してよかった。

### (3)教育ボランティアを導入した授業の成果と課題（「助産診断技術学」）

従来の保健指導のロールプレイは、学生同士や教員を相手に行っていたが、今回、教育ボランティアとして、実際に妊娠期および産褥・子育て期にある地域住民女性がロールプレイに参加したことにより、学生は実践に近い形での保健指導を経験することができた。今回の授業における学生の様子や感想から、学生は、保健指導における態度や技術に関する自らの課題を明らかにすることができ、また、助産師として妊産褥婦から期待されていることを実感できるようになったと考えられる。

一方、授業後も、大学（学生）に向けてメールなどでメッセージをくれる教育ボランティアや、妊娠期に続いて産褥期も協力したいと申し出る教育ボランティアもいた。また、本学の実習先の病院で分娩することになり、本学学生が担当になった教育ボランティアもいた。このように教育ボランティアを導入した効果は、単に授業の中だけにとどまらず、妊娠期から子育て期に渡って、何らかの形でその後も波及していくと考えられる。

「助産診断技術学」において教育ボランティアを導入した授業の課題として、まず、妊産褥婦である教育ボランティアのうち、特に妊娠期の女性との出会いは、年度初めにあらかじめ計画できるものではない。また、子育て期にある教育ボランティアの場合、乳児の体調などで、当日まで参加が確定できない場合もある。これらのことから「助産診断技術学」において教育ボランティアを導入する際には、計画や運営に柔軟さが必要であり、担当教員には、通常の教授術に加えて、コーディネート能力が要求される。そのため、担当教員がそのようなコーディネート能力を養う機会を保証することも今後、重要である。

さらに「助産診断技術学」では、胎児心音聴取など、胎児診察の技術にも踏み込むことになるため、教育ボランティアへの倫理的配慮を特に明確にする必要があり、現行の教育ボランティアの募集・登録・依頼システムでは不十分な点がある。今後は、教育ボランティアを導入する授業の内容に応じて、教育ボランティアへの倫理的配慮や責任の所在を明確にし、参加申込用紙なども見直す必要があると考える。そうすることが、教育ボランティアと学生双方の安全を守り、さらなる教育内容の充実につながると考える。

## 10) 健康生活支援学実習 I

### (1)教育ボランティアを導入した授業の実績（「健康生活支援学実習 I」）

カリキュラム改正後、新たな実習科目として「健康生活支援学実習 I」が始まった。この授業（実習）の目的は、本学現代 GP の取り組みの主要な目的である「地域住民の健康生活を支援する学生の実践能力の育成」そのものであり、具体的には「地域で生活する人々とかかわる中で、生活と健康に関する人々の価値観を理解し、人々が健康を維持・増進するための支援のあり方を考察する」ことである。したがって「健康生活支援学実習 I」は、本現代 GP の最も主要な取り組みであり、地域住民との協働がなければ実現不可能な取り組みである。

「健康生活支援学実習 I」の実施日（期間）、対象学生、授業内容、事前協力依頼機関、教育ボランティア（実習ボランティア）、実習協力施設などは、次のとおりである。

① 実施日（期間）：平成 20 年 2 月 12 日（火）～29 日（金）（土日を除く）（3 週間）

② 対象学生：2 年生 81 名

③ 授業（実習）内容

学生はあらかじめ 10 グループ（8 名ずつ）に分かれ、各グループが本実習のフィールドとなる西区 10 地区（表 II-1-23 参照）のうち 1 つの地区を担当した。各グループは、本実習の事前学習としての「地域看護援助論 I」の授業の一環で、自分たちが担当する地区における地区診断（地域の特徴を知り、健康課題を明らかにすること）を、インターネットを利用したり、各種資料を参考にして行った。その上で、以下の a～d に示す内容について、実際に担当地区に出向いて実習を行った。このうち a～c については、学生が 2 人 1 組になり、訪問先や踏査する場所・施設などを自らが決定し、連絡や調整も学生自身が行った。また、実習最後の「グループ発表」は、実習中に協力を得た関係者を招き、学内で行った。

表 II-1-23 実習地区と担当グループ (G)

G	実習地区	G	実習地区
1	学園都市	6	井吹西
2	伊川谷	7	神出
3	有瀬	8	押部谷西
4	長坂	9	竹の台
5	井吹台	10	桜ヶ丘

- a. 地域住民（教育ボランティア）の「家庭訪問」
- b. 地域住民（教育ボランティア）が健康生活を維持するための「活動等に同行」
- c. 健康生活に関する地域の社会資源や課題などを調べる「地区踏査」
- d. 地域の保育所（2 日）や小学校（1 日）における「健康生活に関する実習」
- e. 実習中に体験した学びについての「グループ発表」（準備 1 日、発表・討議 1 日）

④ 実習の事前協力依頼機関・組織

学生主体の地域での実習を円滑に行うため、事前に、表 II-1-24 に示したような組織・機関に実習への協力を依頼した。

表 II-1-24 「健康生活支援学実習 I」における主な事前協力依頼機関・組織（依頼内容）

◆西区保健福祉部健康福祉課（実習の概要説明、他機関への依頼協力）
◆西区神出連絡所（学生の自転車配置協力）
◆西区押部谷連絡所（学生の自転車配置協力）
◆西区民生委員児童委員協議会（実習地区での教育ボランティアの紹介依頼）
◆西区社会福祉協議会（神戸市立の児童館への地区踏査での協力依頼）
◆西区あんしんすこやかセンター連絡会（地区踏査で訪問時の協力依頼）
◆神戸市教育委員会（小学校実習の概要説明、校長会での紹介依頼、事後の指導）
◆西区小学校校長会（小学校実習の依頼）
◆学園都市連絡会（実習開始の報告と教育ボランティアの登録依頼）

⑤ 教育ボランティア（実習ボランティア）

上述の「家庭訪問」や「活動等に同行」する際の受け手として、あらかじめ教育ボランティアとして登録した地域住民 87 名（87 世帯）の協力を得た。

⑥ 実習協力施設（学生が訪問した施設）等

上述の「地区踏査」や「活動等に同行」する際、学生が訪問し、協力を得た主な施設を表Ⅱ-1-25に、「子どもの健康生活に関する実習」で協力を得た保育所・小学校を表Ⅱ-1-26にそれぞれ示した。また、学生が同行した地域住民の主な活動等は「病院受診」「リハビリ受診」「デイサービス」「給食会」「友愛訪問」「手話教室」「ボランティア劇団」「地域パトロール」「育児サークル」「3歳児健診」「予防接種」「梅見のハイキング」などであった。

表Ⅱ-1-25「健康生活支援学実習Ⅰ」で学生が訪問した主な施設

G	実習地区	施設名
1	学園都市	学園東町地域福祉センター
		学園西町地域福祉センター
		太山寺児童館
2	伊川谷	伊川谷地域福祉センター
		まゆか保育園（伊川谷児童館）
		神戸市西区役所伊川谷連絡所
3	有瀬	有瀬地域福祉センター
		ながさかあんしんすこやかセンター
4	長坂	神戸市西区社会福祉協議会
		あんしんすこやかルーム有瀬
		神戸市立有瀬児童館長坂コーナー
		CHIAKI ほおずき
		神戸市シルバー人材センター西区センター
		神戸学院大学有瀬キャンパス総務課ボランティア活動支援室
5	井吹台	大慈あんしんすこやかセンター
		つぐみ保育園
		井吹東地域福祉センター
		井吹台児童館
6	井吹西	児童館
		地域福祉センター
		西神井吹台住宅 LSA 室
		医療法人社団クリニック希望
7	神出	地域包括支援センター
		神出児童館
		西区役所神出連絡所
		神出地域福祉センター
8	押部谷西	西区役所押部谷連絡所
		押部谷地域福祉センター
		押部あんしんすこやかセンター
		押部谷児童館
9	竹の台	地域包括支援センター
		竹の台児童館
		竹の台地域福祉センター
10	桜が丘	桜が丘自治会館
		桜が丘地域福祉センター



表Ⅱ-1-26 「健康生活支援学実習Ⅰ」で協力を得た小学校および保育所

小学校（神戸市西区）	保育園（神戸市西区）
◆太山寺小学校 ◆小寺小学校 ◆井吹西小学校 ◆東町小学校 ◆井吹東小学校 ◆長坂小学校 ◆押部谷小学校 ◆神出小学校 ◆竹の台小学校 ◆桜ヶ丘小学校	◆あさひ保育園 ◆弁天保育園 ◆市立玉津保育園 ◆あゆみ保育園 ◆平野保育園 ◆市立押部谷保育園 ◆竹の台保育園 ◆持子保育園 ◆市立王塚台保育園 ◆つぐみ保育園 ◆ひまわり保育園 ◆YMCA 保育園 ◆にこにこ保育園 ◆YMCA 保育園（分園）



地区踏査中の学生



実習最終のグループ発表会

(2) 教育ボランティアを導入した授業における感想・意見（「健康生活支援学実習Ⅰ」）

「健康生活支援学実習Ⅰ」は、多くの教育ボランティア（実習ボランティア）、その他の地域住民、地域の多様な施設、関係機関の協力のもと行われたが、実習を終えた学生の主な感想・意見を以下の表Ⅱ-1-26に示した。

表Ⅱ-1-26 学生の主な感想・意見「健康生活支援学実習Ⅰ」

<ul style="list-style-type: none"> <li>◆地域での活動をたくさん知れて、自分の地元の地域でどのような活動が行われているのかを知りたいという動機づけになった。</li> <li>◆とても楽しい実習だった。もっともっと長く実習をしたいと思った。</li> <li>◆教育ボランティアにいろいろな話を聞いたり、実際に活動に参加してもらい、とてもよい学びになった。しかし、元気な人ばかりではなく、支援を必要としている人のインタビューもできればよかった。</li> <li>◆多くの人とかかわりをもつことによって、様々な生活や健康に対する価値観などを知ることができ、よかった。</li> <li>◆人とかかわり方や地域住民の力に気づくことができ大変よかった。</li> <li>◆実習を通して、様々な人と出会い、つながって、とても良かった。この実習で、人とかかわること、人に関心をもつことの大切さを学べた。達成感のある実習だった。</li> <li>◆実習を通して、地域の人話を聞いたり、地域の歴史を教わったり、本当に多くのことを学んだ。その中で健康への支援も考えることができ、よかった。</li> <li>◆見知らぬ人と話すのが苦手ではなくなった。</li> <li>◆地域の人たちの助けあう姿がよくわかった。</li> <li>◆健康維持するための取り組みが数多くあることを知った。</li> <li>◆地域の社会資源をもっと理解したいと思った。</li> <li>◆住民自身の取り組みや活動がすばらしかった。</li> <li>◆小学校や保育所での保健活動の重要性が理解できた。</li> </ul>
---

### (3)教育ボランティアを導入した授業の成果と課題（「健康生活支援学実習Ⅰ」）

「健康生活支援学実習Ⅰ」において、実習を行う地区の民生児童委員から推薦を受け、登録した教育ボランティア（実習ボランティア）は、大変に協力的であった。「家庭訪問」での訪問時間は、1回につき、30分から3時間程度にも及んだが、教育ボランティアは、学生に「教えてあげたい」「何か話さなくては」という気持ちが強く、教育ボランティア主導で話が進む傾向があった。しかし、教育ボランティアから直接に話しを聴くことで、学生が訪問家庭の生活ぶりを具体的にイメージし、その家庭の現状も把握でき、個々の健康課題を考えることができていたと思われる。また、地域での多様な活動に同行することで、教育ボランティア以外の地域の人々ともふれあい、地域の様々な人の健康観や社会資源の利用状況などについても学ぶことができていた。

この実習を開始するまで、担当の教員は多くの時間をかけて準備してきたが、今回は初めての経験であり、3週間の毎日が緊張の連続であった。しかし、学生と一緒に地区をまわり、地域住民と接する楽しさを学生以上に教員も味わっていたように思う。

「健康生活支援学実習Ⅰ」の実習終了後には、学生は教育ボランティアへのお礼状を書いて届けた。また、実習でかかわった地域の施設や学校から、学生に、様々なボランティアの依頼がくるようになり、それらのボランティア活動にも学生が自主的に参加し、今まで以上に、大学と地域の結びつきが深まってきているように思われる。

最後に、今回の「健康生活支援学実習Ⅰ」で得られた具体的な成果について、以下に述べる。

- ① 実習開始当初、学生の多くは、教育ボランティアの家庭や施設へ電話で連絡をとる際、要領を得ず、かなりの時間を要する状況であった。しかし、実習が進むにつれて、多様な発達段階にある地域住民とかかわる楽しさを経験すると同時に、他者とかかわるマナーを身につけ、相手の立場を考え、主体的にかかわり、行動する力を獲得することができた。また、グループのメンバーと協力して実習を進め、主体的な行動計画の立案ができていたグループが多かった。
- ② 学生全員が保育所と小学校で子どもの健康生活に関する実習を行い、また、多くの学生が地域の児童館や高齢者の行事に参加することができ、学生はあらゆる世代の生活を知る機会となった。教育ボランティアの家庭への訪問や地域での多様な活動に同行することを通じて、地域で生活している様々な発達段階にある人びとが、1人ひとりの価値観に基づき自身の健康について考えていることが理解できた。また、地域で生活する人とその家族や地域住民との関係なども、その人の健康に影響を及ぼしていることを多くの学生は学ぶことができていた。しかし、健康な人々への支援について考えることが困難な学生も多かった。積極的傾聴や指示的支援の解釈が不十分な学生もいたが、それが地域で生活する健康な人々への支援の一つであることを、教員からのアドバイスや実習後のカンファレンスによって、気づき学ぶことができていた。
- ③ 事前に実施した地区診断をふまえて、実際に地域に出向き、教育ボランティアや地域の人々から話しを聞き、学生自身の目で見ることにより、担当した地区の成り立ちや

- ④ 地区踏査において、学生は、実際に担当地区を歩いたり、バスに乗ったり、自転車で移動したりしながら、その地区について調べてまわることにより、地図や既存の資料などではわからない、担当地区の生活環境を住民の目線で観察することができた。また、公園やスーパー、畑、市場など様々な場所で出会った住民に積極的に話しかけ、人々が生活している地区の特徴やニーズを知ることができた。さらに、担当地区には、どのような社会資源や施設があるのか、住民組織やボランティア団体、民生児童委員などについても具体的に理解をし、それらの目的や役割を学ぶことができた。どのグループの学生も、担当地区の地域福祉センター、児童館、地域包括支援センターなどを訪問して、様々な情報を得たり、活動に参加していた。また、それら以外にも、主体的に連絡をとって、消防署、シルバー人材センター、農協、他大学のボランティア活動支援室、診療所などを訪問している学生もいた。学生により地区踏査の回数には幅があったが、デジタルカメラで撮影したり、授業で作成した社会資源マップを活用するなどの工夫をして、学生間で情報の共有を行うこともできていた。
- ⑤ 実習最後の学内でのグループ発表会では、各地区における実習の学びを共有するために、各グループが、実習で学んだこと、担当地区の健康課題などを 15 分間で発表した。司会など、発表会の運営も学生が交代で行った。各グループとも、短時間にもかかわらず、写真や音楽などを有効に活用して素晴らしいプレゼンテーションを展開した。学外からも、約 30 名の教育ボランティアや民生児童委員、行政関係者の参加があり、活発な質疑応答や意見交換が行われたが、学生の発表は概ね好評であった。発表会に参加した教育ボランティアの多くは、自分たちが実習に協力したことが、少しでも学生の役に立ったことをすごく喜ばれていた。また、住民から、従来から居住している住民と、新興住宅地の住民との交流が、まだまだ進んでいないという意見が述べられ、今後の地域の課題として、参加者に共有されるという一幕もあった。
- ⑥ 今後の課題としては、学生が実習を行う地区をどのように確保していくか、また、教育ボランティア（実習ボランティア）をどのように確保していくか、さらに、地域の機関や組織との協力体制をどのように維持していくか、ということが挙げられる。これらの課題を克服するためには、今後も、常日頃から、地域貢献・教育・研究など、あらゆる場面を通して、大学と地域の連携・協働を図っていく必要がある。最後に、学生の健康生活を支援する能力は、直ちに形となって表れることはないだろうが、今回のような実習を継続・発展させることにより、地域や生活に根ざした看護を展開できる学生が、少しでも多く育ってくれることを期待したい。